

2007年 フィールドワークから (1)

鷹取 健

2007年8月1日、2日の生物サークルのフィールドワークは、日本モンキーセンターや海上の森の見学で、予想以上の価値ある収穫が得られた。

1. 日本モンキーパーク見学

「日本モンキーパーク」という名称が正しいか否か、実は私にははっきりしない。犬山市大字犬山字官林 26 にあり、遊園地と世界サル類動物園に大別される。

8月1日、小川郁・堀雅敏・鈴木綾子・山崎慶太の皆さんと私、それに吉村成公さんは、まず木曾川河畔のホテルに行って荷物を置き、身軽になってから再び名鉄犬山線の電車に乗り、犬山遊園駅で下車。ここからモノレールで日本モンキーパークを目指した。

はじめの打ち合わせでは、13時30分からという学芸員のお話が14時30分からということになった。山崎さんが作ってくれた「日本モンキーセンター見学会 参加証 科学教育研究協議会」を胸に付けて歩く。なお、江川多喜雄さんたちと一緒に見学をすることになっていた。

入園して早速食堂に入り、昼食をとった。これも江川さんたちと一緒にやった。食後、講演が始まるまで園内の展示施設の見学を始めた。

(1) 放飼施設のサル 学習の場

1967年には京都大学霊長類研究所が日本モンキーセンターに隣接されてできた。以前私が見学したとき、「放飼施設」と称して、パタスザル、クモザル、ハヌマンラングールなどを見せていたのが一番の収穫であったと感じていた。サルの行動で、地上ではなくて樹上を渡る、あるいはこれは四足で走り渡ると表現した方が適切であると思うのであるが、その行動の素早さに驚かされたのである（『理科教室』に報告した）。

狭い檻の中で飼育されているサルでは、行動の様子は分からないと思う。ここには研究誌や一般向けの雑誌もあって、学習に便利であると思っていた。

見学会という場合は比較的費用がかからないと思うが（今回無料）、普通の見学（学校の行事など）では、ここまでバスや電車を利用して来るのは容易ではなかろう。日本モンキーパーク入園料はおとな 1,600 円、こども 800 円である。

（２）世界サル類動物園の見学

ここには 73 種約 650 頭のサルがいる。今回の見学では、これらをすべて見るという見学計画はなかった。

学芸員のお話を聞くため、と言ってよいほどの計画であって、時間の余裕があればサル類を短いとはいえ行動じっくり見届けようというものであった。私以外の人もこのように受け取っていたと解釈している。

ギボンハウス

昼食後すぐに見学を始めた。ギボンが大きな声を出している。マダガスカルでの原猿類の叫び声大きいものがあることは堀さんのビデオでも分かっていた。「枝渡り」もよく見える。見学者はモンキースクランブルに引き寄せられていく。ボウシテナガザル、シロテナガザル、アジルテナガザルの 3 種が展示されていた。

「森」の高い「樹上」を移動するサルたち

ビッググループ、エコドーム、モンキースカイウェイ、リスザルの島がまとまって作られている。というより、敷地の面積がそうさせているということかも知れない。

説明では「かれらは自由な行動が観察できる」としているが、人間社会でいうと公園の鉄棒、ジャングルジム、体育館の体育用器材に例えられ、多少の樹木があるとはいえ、飼育設備が最近改善されたものの一つ、東京都多摩動物公園のオランウータンの「渡り」施設の方がよいように感じた。

さて、フクロテナガザルがビッググループ、エコドームにいた。そしてジェフロイクモザルが高いモンキースカイウェイを行き来していた。

リスザルは私たちと接触できるほど近くにいた。もっとも、私たちが近づいたのであるけれども。係の人は触らない様に、と繰り返し注意をしていた。

その他の施設

他にモンキーバレイ、ヒヒの城、カニクイザルの山が間近にあり、さらにビジターセンターの他に南米館、アジア館、Wao ランド、アフリカ館、アフリカセンターがある。

学芸員のお話は 14 時 30 分から始まるから、以後ビジターセンター以外は行かなかった。アフリカセンターにはゴリラがいるはずであった。

(3) 日本モンキーセンター・ビジターセンター

われわれは、8 月 1 日の 13 時 30 分から学芸員の方の講演とバックヤードのガイドツアーをお願いしてあった。

ビジターセンター

ところが、ダブっていたとの連絡があり、14 時 30 分から開始となった。ビジターセンターには、骨格標本、土産物がたくさん置いてあり、短時間ながら標本を眺めるだけでも楽しかった。

講演を視聴する

階段教室で二人の方からお話を聞いた。内容は二つともよかった。

(1) チンパンジーの野外行動

はじめの方の講演は、チンパンジーの野外調査をメインの研究テーマにしているという内容に基づいており、行動観察の一部の映像を映し出しながら説明がすすんだ。これは極めて貴重なもので、パワーポイントであらかじめ作成された写真や図表がよどみなく映写され解説がすすんだ。動画も含まれている。

映写された映像は、NHK その他の TV 放送からの録画記録よりも多少ぼんやりしたものもあるが、研究者の観察そのものの映像で「一種の証拠の映像」であるから、満足できた。以上が行動学の立場からの講演であった。

(2) 霊長類(類人猿)の形態的な特徴と進化を考えた

二番目の講演は、私にとって極めて魅力的な内容であった。「解剖して、その骨から見えてくるもの」を丹念に追いかけて惜しげも無く披露してくれた。『理科教室』2007 年 8 月号には口絵写真(加藤章)に合わせて記事があり(pp.76-80)、この記事の筆者高野智さんが講演してくれたのであったからである。

事情があって、この記事は事前に読んでいなかったのであるが、他の仲間はある程度読んでから、フィールドワークに参加したに違いない。

(3) バックヤード見学と質疑応答

バックヤードの見学を含める、という話を事前に聞いていたけれども、例えば、芝居小屋で言えば楽屋の見学までできたのであり、これはすこぶるよかった。

高野さんは、病気、その他の理由で隔離飼育されていたり、個々のサルの生前の行動・諸データ記載付きで解剖されて、その計測データが加えられ、そして骨格という実物標本が展示されていたのを丁寧に解説してくださった。

解剖室があった。骨だけにする部屋もあった。ここではカツオブシムシが使われていたのである。これらは、みんなビデオ記録してきた。こんな始末だから、見学は日暮れまで続いた。

科教協全国研究大会の生物分科会では、私は”「サルからヒトへの進化」の学習”というテーマの提案をすることにしてきたから、この観点からの見学をしたいと考えてやってきた。そこで、学芸員・高野さんへの質問も、ヒトとその他の類人猿の比較解剖学的内容に終始した。これには極めて明解な解説をしていただけた。

(4) 生物学教育のカリキュラム

全国研究大会が始まったら、生物分科会で提案するのに準備したものを高野さんに進呈して検討をしていただこうかと考えていた。私の「到達目標・内容、教材、学習課題」と教材の一部の DVD はそのままにした。短時間では無理と考えたからであり、ご迷惑かと考えたからである。

(1) モンキーセンターの姿勢

貴重な資料をいただいた。

『サルの王国 ゆかいでたのしい仲間たち』 43pp.、日本モンキーセンター、動物園管理事務所、1986年

『日本モンキーセンターで学ぶみなさまへ サルを学べばヒトがわかる!』 10pp.、日本モンキーセンター、2006年

の2冊で、前者は改訂版を計画中ということであった。『サルの王国』から教材

として何が使用できるだろうか。「人間に近いサル」のうちゴリラの二つの写真(p.5)は利用させてもらったらいと思う。次のチンパンジーでは、これは及第に近い写真であると思う(pp.6-7)。学校教育用の編集は未だし、と感じた。

(2) 教材写真をみんなで撮ろう

われわれは知ろうという気持ちが強くて、学習課題を考えて教材を選択してきている。教材写真は自分で撮ろうではないか、と感じた。たとえば静止画として、ゴリラでは前肢の指の形状が明瞭に分かる写真を使いたい。また前肢の着地の様子の写真を使いたいのである。それから後肢の足裏の様子、歩行中の全体の写真である。

これらは動画でも欲しい。『サルの王国』で、チンパンジーは草に覆われて四肢がはっきりとは見えない部分がある。私の場合は多摩動物公園でチンパンジー、上野動物園でゴリラを撮影しているが、日本モンキーセンターでも撮影ができればよかった。これは改訂版を作るつもりでいる。

2. 海上の森見学

8月2日、全国研究大会運営委員会主催のフィールドワークに参加という形で見学をすることができた。あらかじめ申し込みをしておいた訳で、科教協の担当は愛知支部の鈴木久さんである。このフィールドワークには、あいち海上の森センターも今回の見学コースにあった。見学後、リニアモーターカーに乗車して科教協全国代表者会に出席するために宿舎に向かい、夕方からこれに出席した。

(1) 愛知万博

2005年に「自然の叡智」をテーマにした日本国際博覧会（愛知万博）が開催された。この準備段階で大きく浮上してきたのが「海上の森」を守るという問題であった。

博覧会後に住宅団地建設を計画された地域は、貴重な自然を守るという人たちからは「建設反対」という行動があって、計画の無謀さを訴えていた。市民運動の一つの例であり、この住宅団地建設は食い止められた。

(2) 海上の森見学

集合地点は愛知環状鉄道山口駅、駐車スペースであった。

ここから「里山サテライト」(かたりべの家)、海上の森センターというコースで地元の方が数人で迎えてくれて、そのうち二人の方が道々説明をしてくださった。私は汗を拭き拭き、ビデオカメラと三脚を持って参加者の後や前を歩いて撮影してみた。ふだん歩かないコースも案内していただいた。

何度か訪れて、一つのビデオ作品ができたならよいな、と考えているが、かなり難しいなという気持ちがしている。まずは地元の方々のシナリオと撮影計画の中にお手伝いをさせてもらう、というところではないか。

鈴木綾子さんから次のような報告をいただいた。

海上の森で撮った写真(静止画)を図鑑で同定したところ、

「モチツツジ、タカノツメ、イソノキ、アベマキ、ツブラジイ、コバノミツバツツジ、(ソヨゴ)などは東京や神奈川には分布していませんことがわかりました。

保育社カラー自然ガイド『野山の木』(堀田満著)は分布が地図上に示されているので参考になります。今年は忘れないうちに、フィールドワークの報告を書こうと思います。」

(2007年9月14日記、つづく)